

修士論文題目 中ソ関係と包産到戸の廃止について
氏名 WANG KANG
学生番号 G0220011

修士論文要旨

中国では包産到戸が三回も表われ、三回とも廃止された、その中で毛沢東の態度が決定的な要素となっていた。本稿は、中ソ関係の発展という独特な視点から、ソ連共産党第二十回大会から中共八回十中全会までの間の中ソ関係を研究背景に、時間順に包産到戸の三段階において、中ソ関係の発展が包産至戸の廃止に与える影響を全面的に分析してまとめた。これを踏まえて、本論は一層深く研究し、毛沢東が中ソ関係の悪化に伴うソ連修正主義に対する警戒こそが包産到戸廃止の主要な原因であることを論じた。

第一章

1955年夏以降、毛沢東は中国の農業集団化の発展を加速させた。この過程で、農民の労働と収入は比例せず、「大鍋飯を食べる」などの問題が長期間に残っていた。これらの問題については、当時の農工部長だった鄧子恢が「包工包産」の生産責任制を提案した。永嘉県委員会副書記、農業を主管した李雲河は『人民日報』で包産到戸に関する記事を見て、永嘉県で包産到戸を試行することを提案した。結局、包産到戸を試行した地区は全部大增産になった。1957年5月以降、全国で「反右派闘争」が行われた。反右派の中で李雲河が主張した包産到戸は原則的、路線的な誤り、右傾機会主義的な誤りで、富裕中農資本主義の思想の反映だと認定され、批判された。1958年2月から6月まで、永嘉県に包産到戸を主張していた関係者に処分を行った。毛沢東は「反右派闘争」を発動した原因は、当時の国際的な背景において見なければならない。1956年2月のソ連共産党第二十回大会の開催はシンボリックな事件で、フルシチョフによる会議の閉幕後の「秘密報告」が国内外に大きなセンセーションを引き起こした。東欧のいくつかの社会主義国家と国際社会で「反ソ反スターリン」の波が巻き起こった。「ポーランド民主化運動」と「ハンガリー動乱」が発生した後、毛沢東はソ連と東欧社会主義国家は修正主義の方向に発展していると思って、社会主義国家では資本主義が復活する危険があると考えていた。毛沢東と中共中央は、フルシチョフの「秘密報告」に注目しており、修正主義に対する警戒が結構強くなった結果、「反右派闘争」を発動した。

第二章

大躍進運動が始まった後、1959年春、多くのところで飢饉が発生した。深刻な食糧不足によって、農民たちはまた自発的に包産到戸をやり始めた。大躍進運動と人民公社運動における問題を解決するため、中共中央と毛沢東は1959年6月末に江西廬山で中央政治局拡大会議を開催した。会議で党内の上層部で常に率直と直言で有名になり、毛沢東とは湖南同郷の彭徳懐国防部長は会議で近年の中共政策と党内政治生活に存在する問題を指摘し、更に7月13日に毛沢東に「意見書」を送った。毛沢東は彭徳懐の「意見書」を見て、彭徳懐が問題に対してあまりにも大袈裟に見ていると思った。そして毛沢東は各種の兆しを連想し、党内に総路線を反対し、大躍進運動と人民公社運動を否定する人が存在していると断定した。廬山会議が終わった後、包産到戸が「右傾思想の表現」、「人民公社の集団労働を根本的に否定し、単独作業の古い道に退却させたやり方だ」と批判された。1959年の廬山会議を研究するために、この歴史の誘導体

である国際的な要素を見落としてはいけない。1959年4月24日、彭徳懐が中国の軍事友好代表団を率いてポーランドなどの国を訪問し、フルシチョフが率いたソ連党政代表団と数回接触した。彭徳懐が帰国した当月、ソ連は契約を破棄し、中国に原子爆弾のサンプルと技術資料の提供を拒否した。このすべては1959年の廬山会議で、特にソ連から大躍進運動、人民公社化運動の非難が相次いでいる時に、毛沢東をはじめとする中共中央はフルシチョフとソ連国防部に對する警戒を強めていた。毛沢東と多数の中共中央委員の印象の中で、彭徳懐が党の主席に意見を提起するだけでなく、フルシチョフが大躍進運動と人民公社運動を攻撃する言論と一致し、「内外呼応」の重大な容疑があるということになった。

第三章

人民公社化で分配の平均主義を実施し、公共食堂を作り、「大鍋飯」を食べた。これは億万の農民の生産意欲をひどく挫いた、自然災害の影響もあって、農業生産は頭打ちになった。農業の後退は国民経済のアンバランスを引き起こし、1959年から1961年にかけて三年間の経済困難を招いた。1960年11月、党中央は「左傾」の誤りを廃止し、党の農村における経済政策を調整し始めた。集団経済の経営管理を整頓する過程で、生産責任制を実行することが新たに提起され、包産到戸がまた各地で台頭していた。1961年の春、安徽省委員会は合肥市郊外の蜀山公社井崗大隊の南新庄小隊にチームを派遣し実験を行った。1961年3月中旬、全省39.2%の生産隊が「責任田」を実施した。包産到戸の問題に対して、毛沢東が北戴河中央工作会議と中共八回十中全会で、二つの階級、二つの道路の闘争の観点から厳しく批判した。北戴河会議で毛沢東は演説の中で「階級、情勢と矛盾」の新しいテーマを提出した。毛沢東が階級矛盾と階級闘争問題を提起したのは、国際から見ると、ソ連共産党の「全国国民党」、「全国民国家」の言い方に警戒していたからだ。国内から見ると、近年現れた包産到戸、いわゆる「単独作業」に對する警戒であった。

まとめ

結果として、以下の三点が明らかになった。第一に、第一回包産到戸が廃止された根本的な原因はソ連共産党第二十回大会によるソ連修正主義に對する警戒だった。第二に、第二回包産到戸が廃止された根本的な原因はフルシチョフと彭徳懐の公務接触にもたらしたソ連修正主義に對する警戒だった。第三に、責任田はソ連修正主義の影響を受けた国内政策だと見られて廃止された。以上の調査結果から、中ソ関係の悪化に伴うソ連修正主義に對する警戒は毛沢東が包産到戸に反対する主要な原因だと考えられる。